大宰府アカデミー・令和編　第13講　令和6年4月17日（水）質問及び回答（Q＆A）

「　室町期の少弐氏と朝鮮　」
講師・回答：　伊藤　幸司先生（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/　少弐氏が朝鮮との関係にそれほどまでにこだわった理由は何でしょうか。

A/　回答

　少弐氏の朝鮮通交は、当初から対馬宗氏に依存して行われており、少弐氏は宗氏ほど朝鮮通交にはこだわっていなかったように思われます。
　むしろ、朝鮮通交をすることによって、一定程度の利益を獲得できれば良いという程度のものであった可能性があります。
　朝鮮通交を生命線とした宗氏とは、朝鮮通交に対する思い入れの度合いは異なっていたと考えられます。

Q/　北部九州をおさえていた少弐氏が、その地の利を活かしきれず、結局、戦国大名として残れなかったのはなぜでしょうか。

A/　回答

　大友氏や島津氏と異なり、本州から関門海峡を越えて大内氏が北部九州地域に進出してきたことが大きな要因です。室町幕府と連携しながら進出する大内氏に対して、少弐氏は有効な手段を打てず、結局、じり貧になってしまいました。一方、大友氏や島津氏は、それぞれ内部抗争などはあっても、豊後や南九州に大内氏のような強力な外的勢力が直接進出してくることはありませんでした。

Q/　朝鮮にとって、宗氏をはじめとする倭人との交易にはどのようなメリットがあったのでしょうか。

A/ 回答

　倭寇対策ということのほかに、朝鮮自身も日本との通交貿易によって入ってくる物資を必要としていた面があります。例えば、博多商人などの日本側通交者は、東南アジア産の蘇木や胡椒などを入手して朝鮮に輸出していましたが、それらは朝鮮国内でも必需品でした。

※ ご質問ありがとうございました。